

近江学研究所主催公開講座・近江学フォーラム会員限定講座 報告

成安造形大学附属近江学研究所

近江学研究所主催公開講座・近江学フォーラム会員限定講座

報告

成安造形大学附属近江学研究所

Name:

Omi Multicultural Institute

Title:

2019 Report on Public Lectures Hosted by the Omi Multicultural Institute

Summary:

Each year Omi Multicultural Institute holds public lectures for the dissemination of information regarding the culture of Omi. Here I will report on lectures 158 to 168, which were held between April 2019 and December 2019.

はじめに

近江学は、近江という地域固有の風土を改めて検証する学問です。

20世紀後半の日本人は、大量消費・大量廃棄の暮らしをひたすら追い求め、優れた素材や技術、豊かな暮らしの知恵や自然観を切り捨ててきました。

この50年間に私たちが失ったものに思いをめぐらせ、過去の記憶を手がかりに、ごく当り前のものの中にひそむ美しさ、かけがえのなさ、本来の豊かさを未来に向けて再生しなければなりません。文化とは人の営み、すなわち「暮らしのかたち」のことです。

近江学研究所では、豊かな文化資源に恵まれた近江を多角的にとらえるために「近江学」と名付けた講座を開講しています。本稿では、平成31年・令和元年（2019）年度に開講した158回～168回までの講座概要を報告します。

※1～142回の講座概要は、近江学研究所発行の文化誌「近江学」創刊号～10号に、143～157回の講座概要は、近江学研究所紀要第8号に記載しています。



2019年度近江学パンフレット表紙

●第158回

特別公開講座

「日本の食とお茶 ―近江の食文化にからめて―」

日時…4月27日（土）14:00～15:30

場所…コラボしが21 大会議室

講師…熊倉 功夫 氏 (MIHO MUSEUM 館長、

国立民族学博物館名誉教授)

2019年度特別公開講座は、2013年「和食…日本人の伝統的な食文化」としてユネスコの無形文化遺産登録にご尽力された熊倉功夫氏をお迎えし開催しました。

講演では、私たちにとって「和食」とはなにかをお話いただきました。古来から自然の中に存在する霊的なものと人との交信のかたちとして「行事食」があることを「花見」から読み解かれ、そこには日



2019 年度特別公開講座チラシ

本人のもつ移ろいゆく自然を尊重する姿、恵みに対する感謝の気持ちが表れていること。また、鎌倉初期から始まった茶の湯文化が生み出した「懐石」にもある一汁三菜が、今の家庭料理につながっていること。「家庭料理」は、旬のものを食べ、つくる人が食べる人の顔を思い浮かべてつくられること。それが「食文化の原点」として一番大切な姿であることが話されました。

講座の後半では、熊倉氏とともに4月初頭に大津市仰木地区へ訪れ、仰木のハレの食事を取材した様子を本研究所加藤副所長がスライドで報告しました。熊倉氏からは、納豆餅という滋賀県内では他の地域に見られない独特の食文化に驚いたというエピソードが紹介され、近江には各地に家庭の中に生きている郷土料理・和食の文化があり、それは、とても価値があることで、ぜひ後世に引き継いでほしいと語られました。ほぼ満席の約150名の受講者から、大変満足度の高い感想をいただきました。



講演風景



熊倉功夫氏

●第159回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―食のかたち―料理が伝える文化とは!？」

日時…5月18日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…川西 豪志 氏(株式会社木馬代表取締役、

ひさご寿し料理長)

対談…石川 亮 (本学准教授・本研究所周員)

水郷と商家の街、近江八幡市で地元の食材をふんだんに使う料理人、寿し割烹と日本料理を楽しませる「ひさご寿し」2代目川西豪志氏をお迎えしました。本研究所の石川亮研究員がナビゲートする対談形式で講演を行いました。世界的に和食の注目度は高く、その理由に「和食…日本人の伝統的な食文化」が無形文化遺産に登録されたことは大きい。登録された当時、川西氏はフランスの宮殿で外務省の方々に懐石料理を振る舞うメンバーとして参加され、またその2年後に開催されたミラノ万博でも、日本食チームの一人として日本食を世界に広めるために参

加された。それをきっかけに、講演ではなぜ日本料理をつくるのか、自分が暮らす土地の食や文化を誇りに思っているか、日本食文化の中で近江料理とは何かを考え、近江八幡の自然環境、生産者や漁師などいろいろな人に地域の食を教わることを始めたというエピソードが語られました。講座の中では、川西氏がこれぞ近江の郷土食と考える「丁子麴の酢味噌和え」が振る舞われ、味覚を通じた食文化の深さを味わう講座となりました。



川西豪志氏



石川亮研究員と対談

●第160回

「淡海の夢2019 仰木・棚田山写生会」

日時…6月8日(土) 9:30～17:30

場所…大津市仰木周辺

講師…永江 弘之(本学教授・本研究所周員)、

待井 健一(本学非常勤講師)

琵琶湖を中心とした棚田・里山、湖国の風景は今、次世代に引き継ぎたい美しく貴重な日本の原風景として広く注目されています。「淡海の夢」は、年2

回の写生会と公募風景展を通して、近江の素晴らしさを体感し固有の価値を再発見する講座です。本学イラストレーション領域で風景イラストを専門とする永江弘之研究員が、風景写生のコツをレクチャーし、講評会を実施しました。

今回の開催地は、大津市仰木地区でした。風が強く天気が目まぐるしく変わり写生には難しい日となりましたが、3年ぶりに仰木地区で棚田を描けることを楽しみに来られた受講者が集まりました。当日は、仰木活性化委員会に協力いただき受付場所として「ふれあい御所の丘公園」を使用し、講評には仰木市民センターをお借りして実施しました。



大津市仰木地区での写生会風景



仰木市民センターにて開催された講評会の様子

講師…高橋 順之 氏（米原市教育委員会歴史文化財保護課主幹、伊吹山文化資料館学芸員）

米原市で歴史文化・資料館運営を通して広く市民に伊吹山の自然・歴史文化について教育普及に努められている高橋順之氏をお迎えし、国の重要文化的景観「東草野の山村景観」に登録された奥伊吹・甲津原集落について講演いただきました。奥伊吹・甲津原集落は、標高520メートルの高地にあり、西日本屈指の豪雪地として知られており、かつて3本の峠道で湖北と美濃を結ぶ拠点であったことから、頭教踊りや廻り仏、能面などの古い文化や文化財が入り込み、里人によって伝承されてきました。甲津原や坂下の村々が、山深い集落でありながら閉塞した土地ではなく、峠を介した往来がさかんな地域であったことが具体的な事例をもとに語られました。



高橋順之氏



講演風景

●第162回
近江学フォーラム会員限定講座

「衣生活用具からみる里の暮らし」

日時…7月13日（土） 10…50～12…20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…須藤 護 氏（民俗学者、龍谷大学名誉教授、龍谷大学里山学研究センターフェロー）

大津市田上牧地区にある田上郷土史料館に収蔵された民具の調査を10年かけて取り組まれている須藤護氏をお迎えし、民具から土地の暮らしを読み解いていただきました。郷土史料館が設立されたのは昭和43（1968）年。収蔵品のうち最も充実しているのが衣生活に関わる資料で、現在80歳から90歳くらいの女性が、田上にお嫁に来るときに持って来られた日常着、作業着、訪問着その他美しい小物類がたくさん保管されています。この豊富な衣生活用具を通して、当時の田上の女性たちがいかに賢い暮らしを築いてきたか、その暮らし方をひとつひとつ解説いただきました。この調査を経て、2019年3月28日に国の登録有形民俗文化財「田上の衣生活資料」として登録されました。地元の方々の継続的な調査への協力が結実し文化財登録につながったと須藤氏は語られました。



須藤護氏

●第161回
近江学フォーラム会員限定講座
「近江と美濃を結ぶ里」——奥伊吹・甲津原——
日時…6月29日（土） 10…50～12…20
場所…成安造形大学 聚英ホール

●第163回

近江学フォーラム会員限定講座

「甲賀の神仏 ―櫛野寺を中心として―」

日時…9月21日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…高梨 純次 氏(美術史家、公益財団法人秀

明文化財団参事)

近江に現存する秘仏、一般公開されていないものも含め200余点の仏像、神像をカラー写真と文章でまとめた『近江の祈りと美』(2010年、サンライズ出版)を出版された高梨氏に、甲賀の平安彫刻について講演いただきました。この講座は、10月に行う近江学フォーラム現地研修『甲賀の里をゆく』の事前学習として開催しました。講座では、多くの文化財が伝えられている滋賀県の中でも、甲賀市は本山寺院が多い大津市に次いで、2番目の数量を誇っていること。特に、櫛野寺や阿弥陀寺(甲賀市櫛野)には平安古像が集中して伝えられていることを事例を基に解説いただきました。また、現存する神像や仏像について、近年の研究成果を踏まえながら、見学に際しての見どころなどについてお話しいただきました。



高梨純次氏

●第164回

「淡海の夢2019 堅田・湖族の郷写生会」

日時…10月26日(土) 9:30～17:30

場所…大津市堅田周辺

講師…永江 弘之(本学教授・本研究所研究員)、

上原 結子(本学准教授)

今回の開催地は大津市堅田地区でした。堅田は、琵琶湖の水運・漁業など、湖上の特権を持つ堅田衆(湖族)が栄えた歴史ある町。その町並みをはじめ、一休和尚、松尾芭蕉ゆかりの寺院、浮御堂、堅田漁港など、趣深い湖辺の風景が魅力です。今回は、蓮如が真宗の布教拠点として滞在した寺院「本福寺」にご協力を得て、本堂にて受付・講評をさせていただきました。



大津市堅田地区での写生会風景



本福寺本堂で開催された講評会の様子

●第165回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―挑戦のかたち―完全農薬不使用栽培を通してみる、朝宮茶のちから―」

日時…11月9日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…片木 明 氏(茶農家)

対談…真下 武久(本学准教授・本研究所研究員)

信楽の西、国道422号線沿いに店を構える「かたぎ古香園」。6代目当主片木明氏は、昭和50年から朝宮で、お茶の完全農薬不使用栽培を開始し、現在はそのバイオニアとして広く知られています。今回の講座では、片木明氏をお迎えし、「かたぎ古香園」が目指す「安全と安心の徹底した追求」の経緯、また、従来から高級茶として知られている朝宮茶の魅力について語っていただきました。今回は片木氏の意向で、階段式の座席ではなく、講師を取り囲むような車座をつくり、前列はゴザに座布団をしいて、後列は椅子席を用意して、アットホームな環境づくりを試みました。片木氏のお人柄を身近に感じる雰囲気は受講者に好評を得ました。

完全農薬不使用栽培というとてもない挑戦から見えてくる、朝宮の土地や自然、お茶が持つ「ちから」を片木氏のお話や、茶葉の試食や、全員にふるまわれたお茶を味わうことで、体験を通して感じることでできる講座となりました。



会場風景

●第166回

近江学フォーラム会員限定講座

「風景から識る近江 ―文学作品を通して―」

日時…11月23日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…西本 柳枝 氏(文筆業、日本ペンクラブ・日本詩人クラブ・観光ジャーナリスト会議等の会員、旅や観光に関する記事・随筆を主に執筆。)



ふるまわれた朝宮茶の紅茶



会場風景



片木明氏(右)と真下武久研究員(左)

多くの文学作品中に描かれた「文学風景」を、作家のまなざしを想像しながら、その土地をたどっていく醍醐味を西本氏に講演いただきました。本講座では、井上靖『星と祭』、勝海舟『氷川清話』を題材に、文学作品を読み解かれました。「日常の中で見えた風景」になったその土地を、文学作品が新鮮なものにしてくれることがわかってくる。」「文学作品たちからもうぐちよつとしたきつけは人生を豊かにする」。西本氏の感性豊かな語りから、作家たちが近江の風景からすくい取った近江の豊かさに触れることができた講座となりました。



西本柳枝氏

●第167回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―受け継ぐかたち―信楽勅旨、茶器をつくる―」

日時…11月30日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…大西 左朗 氏(陶芸家)

対談…石川 亮 (本学准教授・本研究所研究員)

古くから焼き物の産地として知られる甲賀市信楽町勅旨の陶芸家大西左朗氏の仕事に迫る講座を開催しました。戦後まもなく小物づくりの復興を目指し、先人の仕事を学びながら機能性に優れた独自の作風

を確立してきた左朗氏の実父である大西忠左氏のものづくりの精神性について、つづいて、大西左朗氏とその伝統を継承しながらも新素材の研究開発に取り組まれ、近年では朝宮の茶農家と連携するなど、煎茶を美味しく飲むための茶器を追求している制作活動について、また信楽勅旨の歴史に裏付けられた「陶器窯」の普遍的なものづくりについて語っていただきました。講座の中では、左朗氏自らが、作陶した2種類の茶器でお茶を煎れていただき、前列の方に飲み比べをしていただきました。



大西左朗氏



お茶を煎れる大西左朗氏



「近江のかたちを明日につなぐ展」



「近江のかたちを明日につなぐ展」



石川亮研究員



「近江のかたちを明日につなぐ展」

●第168回

近江学フォーラム会員限定講座

「里坊―律院の庭園と西教寺本堂大壁画」

日時…12月14日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…加藤 賢治(本学准教授・本研究所副所長)

ゲスト…木村 至宏(本学名誉教授・本研究所顧問)

文化誌「近江学」11号、テーマ「里のいとなみ」

の中で、発表した講座タイトルと同名の論考について、筆者である加藤副所長が解説しました。「門前町坂本には名勝庭園を有する里坊が点在するが、その作庭の背景には、比叡山で厳しい修行をしてきた僧侶のある種の悟りに近い思想が流れているのではないか。」また、「西教寺の本堂にある日本画家三輪晁勢が描いた大壁画は、江戸時代初期の禅僧沢庵禅師が西教寺を訪れた時に、詠んだ詩がもとになっている。」と解説した後、ともに自然の中に人間が溶け込み、草木も動物も安らかに暮らす浄土を表しているのではないかと里坊と壁画の共通点をまとめました。そして最後の20分、西教寺の話のつながりというところで、木村至宏顧問が、西教寺を菩提寺とする明智光秀の人柄を西教寺に残る古文書や、木像、梵鐘などの資料を紹介しながら解説しました。受講者からは、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公の舞台をすっかり学ぶことができ満足でしたという感想が多く聞かれました。



会場風景



木村至宏顧問



加藤賢治副所長

編集後記

本紀要では本学研究員からの論考2編と、近江学研究所主催の公開講座・近江学フォーラム会員限定講座の報告1編を掲載します。

加藤研究員の論考は、少子高齢化などの現代的課題を抱える中で近年地域の核として活発に活動している2つの寺院の取り組みを紹介し、将来社会における杜寺の可能性を考察しています。石川研究員は、近江の4つの地域をめぐって出会った独特な魅力を掘り下げて「近江の懐をめぐる3」というかたちで紹介しています。「講座の報告」では、平成31・令和元(2019)年度に開講した158回、168回までの講座概要を報告しています。

本号発行予定の3月現在、新型コロナウイルスの流行のニュースが連日報道されています。非日常的な事態によって社会の基盤がゆらぎ不安が広がる中で、人々の心をつなぎ支えるものについて考えさせられます。本研究所では、近江に内在する普遍的な美やかけがえのない価値などにつながるような研究を今後も積み重ねてまいります。よろしく願います。

編集担当 永江弘之

成安造形大学附属近江学研究所 紀要 第9号

発行日 令和2年3月18日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学
附属近江学研究所

T 520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社